



発行日：平成 29年 9月

編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第 35 回海部会 WG を開催しました！

8月21日（月）に第35回海部会WGを開催しました。
今回は、東幡豆漁業協同組合の会議室をお借りして、高橋さんから渡り鳥と海の環境についての講話をいただいた後、トンボロ干潟での鳥の観察とダム砂を投入した造成箇所の現状を視察しました。



日時：H29年8月21日（月） 10:00～12:30

場所：東幡豆漁業協同組合 会議室

参加者：19名（事務局含む）

◆主な活動内容

1：鳥と海の環境について 高橋さんからの講話



○2014年の海部会WGの一色干潟で探鳥会を行ったときに、足輪と標識のついたキアシシギを確認しました。今回はそのキアシシギの渡りを題材とした海の鳥と環境の関係についてお話をいただきました。

○キアシシギは越冬のためオーストラリアと繁殖地であるシベリアを行き来する渡り鳥です。矢作川で確認したキアシシギは、毎年必ず矢作川河口の干潟にやってきており、矢作川河口の干潟を利用しています。

○このキアシシギが利用する干潟は面積的には非常に狭い範囲ですが、貝類などを捕食する採餌場として利用しており、渡りの途中において大事な場所となっています。

○渡り鳥の仲間は、自分たちの餌が補給できる環境が整っていれば、毎年必ず同じ場所にやってきます。鳥は生態系の頂点にいるため、餌場となる海の環境が悪くなれば、その場所に渡ってくる鳥も減ります。

○鳥の生息と海の環境は非常に密接な関係にあります。



高橋さん提供写真 キアシシギ

2：トンボロ干潟で鳥の観察と造成干潟の現状を確認しました。



○高橋さんに観察用の望遠鏡を準備していただき、海辺の鳥を観察しました。沖合の杭の上にはウミネコ、カワウ、アオサギがとまっていました。また、港寄りの砂浜にはアオサギ、ダイサギがいました。これらは魚や貝を餌とする鳥であり、この干潟を餌場として利用していると思われます。

○既存干潟やダム砂を投入した造成干潟で生き物や底質を観察しました。造成干潟では、昨年の4月に現地視察をした際、大粒のアサリを多数確認できましたが、今回の視察ではアサリの親貝は全くおらず、1cm程度の小粒のアサリしかみつけることができませんでした。



H28. 4 撮影（参考）



H29. 8. 21 撮影

3：話し合い



- ・鳥は大食漢と聞いている。愛知県でも昔は渡り鳥がたくさんやってきたが、今はなくなったということは、それだけ餌が少なくなっているという認識でよいか？（石田）
- そのとおりである。特に愛知県で減少したのは矢作川河口である。埋め立てて高水敷地や砂浜がなくなり、餌が減少したことが影響している。シロチドリやコアシサシの繁殖環境もなくなった。（高橋）
- ・人間活動の影響で増えているのは、カラスやハトくらいである。野生の鳥は餌が少なくなる冬場に死ぬ。カラスやドバトは冬でも餌が豊富にあるので死なない。海だけでなく、チョウゲンボウも人間の作った構造物に依存して増えている。（高橋）
- ・自然界の中で人工物ができると影響がないとはいえない。できると影響はわからない。鳥が減少したり、種類が変わるとするのは海の環境の変化とパラレルである。（鈴木）
- ・報告された人工干潟のモニタリング結果はいい状況に見えるが、今は全くちがう。生き物が皆無である。水がきれいすぎるため、餌がなく、生き物が育たない。アオサが全くみられず、アマモが増えた。（石川）
- ・干潟で礫分が多いのがいいのは、凸凹があったほうがアサリ自身の体力を温存できる、餌となるプランクトンの環境にも良い。冬場の水温も少し高くなり、夏場の水温は少し低くなるので、住環境としてもよい。ただし、砂を投入すると一時的にはよいが、冬を越せなくて死んでしまう。なぜなら、秋から冬にかけての植物プランクトン量が非常に少ないことと、冬場の水温が上昇傾向であることが影響としている。（鈴木）
- ・水温の上昇を抑えるのは難しい。一方、餌の環境をかえることができなくはない。西三河の栄養塩濃度をみると、平成26年くらいから急激にリン濃度が減少している。アサリが一番成長する4月から6月のクロロフィル濃度が非常に低い。冬を越すかどうかはトータルの餌量できまってくる。干潟造成と栄養塩管理はセットで考えるべきである。（鈴木）
- ・全国的にアサリが減少しているのは、同じ理由か？（青木）
- ・アサリは夏に体力が消耗し、冬にむかってのエネルギーをためる時期の秋の水温が上昇し、チッソ、リン濃度が低い。本来水温の低い冬場は摂食しなくてもよいが、水温が高いと摂食しなければならない。ところが餌がない。こういうとき、冬の季節風で海があれば、流されないよう体の態勢を整えるための体力が必要となるが、餌がないためエネルギーを使い果たしてしまい、岸に打ち上げられて死んでしまう。（鈴木）
- ・変温動物は温度が高いほど代謝が大きくなる。常温動物は温度が下がれば代謝が大きくなるが、変温動物は生存のためには温度が低ければ、低いままの方が良い。（石田）
- ・過去の研究事例から下水処理場の水の浄化方法をかえると、チッソ、リンを含んだ豊かな水がでてくることがわかっている。これを色々な団体と協力して実験的にやっていきたい。（井上）
- ・海の環境について、漁協単独で対応するのは困難である。いろいろな立場の人が関わってもらわないと無理である。漁業をふくめて、検討の組織を立ち上げてもらいたい。（石川）
- ・土砂を投入すると一時的に資源が回復するのはわかっている。ただ、それを継続してできないので、資源を継続させることを考える必要がある。個人的には水質の環境基準の総量規制が大きな課題と思っている。次回、自分の持っているデータをふくめて、話題提供したい。（鈴木）

今後のスケジュール（予定）

次回 海部会第36回WGは、10月23日に西尾市で開催します。

・海の水質に関する環境基準と三河湾の近年の傾向について、鈴木先生に話題提供をしていただくほか、井上さんから下水処理水に関する研究事例について紹介していただきます。

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 服部係長

TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100

*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト (yahagigawa@iijnet.or.jp) までお送りください。